



## ●紅花商人 ④長谷川家の 上方由来コレクション

山形市

江戸時代、紅花商人(豪商)として活躍した④長谷川家が贅を尽くして収集した上方由来の文物。現在、(公財)山形美術館で公開され、往時の紅花交易の隆盛を今に伝える貴重なコレクションである。

### 紙本著色紅花図 横山華山筆 六曲屏風

[県指定—絵画] ④長谷川コレクション・(公財)山形美術館所蔵

遠方に山々や川を配し、前方に農村の営みを大きく描いた伝統的な耕作図を基礎とし、紅花製法の過程を丹念な筆致で描いた屏風である。右隻は春の種蒔きから夏の花摘み、花餅(紅餅)の加工を、左隻は花餅の加工とともに荷造り、出荷までの光景が人びとの何気ない生活とともに描かれている。

横山華山は福井藩医の子として福井に生まれ、幼くして孤児となり京都に出たと伝えられる。そこで西陣で機織業を営む横山家の養子となった。横山本家は曾我蕭白と交流があったことから蕭白の画に学んだ。その後、岸駒に入門、呉春にも私淑し、さらに洋風画の表現も取り入れ独自の画境を築いた。描いた画題は多岐にわたるが、特に美人画や風俗的表現に優れ、文化文政期の京都画壇で一家を成した。

本作品は京都の夏を彩る祇園祭、別名屏風祭で披露するため紅花問屋、伊勢屋理(利)右衛門の注文で描かれた華山の代表作である。制作にあたって華山は1819(文政2)年に紅花の産地を巡る取材旅行に出たことがわかっていて、口伝や花餅の大きさの違いから右隻は関東地方、左隻は宮城や山形など東北の産地に取材したと考えられている。一番の見どころは合計220人の人間が繰り広げる多様な表現である。右隻では市場に集まる人びとの喧騒や、川遊びに興じる子どもたちがいる。また、同じく華山による《祇園祭礼図》にも描かれた晩景が、提灯の灯りや飛び交う蝙蝠(こうもり)とともに描かれている。左隻では作業の傍らひと休みのお茶に顔を綻(ほころ)ばせ、おしゃべりに興じる女性たちの表情がなんとも微笑ましい。荷駄に描かれた荷印や銘柄、家屋の調度品まで丹念に描きこまれており、華山の精緻な眼差しを感じることができる。

### 紙本淡彩奥の細道図 与謝蕪村筆 六曲屏風

[国重文—絵画] ④長谷川コレクション・(公財)山形美術館所蔵

松尾芭蕉『奥の細道』全文が墨書され、9場面の画を配する。濃墨の字は大小、肥瘦を交えて単調さを避け、文章が上下に貫通したり、あるいは2段、3段に区切られたり、各場面の展開に合わせて律動を感じさせる構成となっている。全文と画すべてを一望できる屏風仕立てにこの作品の大きな特徴がある。その画は第1扇より「千住の旅立ち」「那須の小姫・かさね」「須賀川の栗の庵の僧・可伸(かしん)」「佐藤嗣信と忠信の妻たち」「塩釜の琵琶法師」「若者の案内による山刀伐(なたぎり)峠越え」「鶴岡の長山重行宅での滞在」「市振の遊女」「大垣の近藤如行宅での再会」が描かれ、5扇目には墨量黒々とした文字で「山形領に立石寺といふ山寺あり」の文字が見える。芭蕉の紀行に即して各場面の情景と人物の心のあり様を軽妙な筆致で表している。

与謝蕪村は大阪市の出身。20歳のころ江戸に下り俳諧を早野巴人に学んだ。茨城、栃木、丹後など遍歴し、京都に定住。画は彭城百川に学んだといわれるが、南蘋派(なんぴんは)や浙派(せつぱ)など明清の画を吸収し、

晩年には独自の画風を築いた。池大雅とならんで日本南画の大成者ともいわれている。

芭蕉を崇敬し、その俳風へと帰るよう説いた蕪村は、京都東山の金福寺境内に芭蕉庵を再興した1776(安永5)年頃より「奥の細道」にちなんだ画卷、屏風を描くようになった。その数は門人への手紙などから10点近くあると推定されるが、現在真筆として広く知られているのは、逸翁美術館、京都国立博物館、海の見える杜美術館の画卷と、本館蔵の屏風の4点である。本作は1954(昭和29)年、重要文化財に指定された。

## 出羽三山巡礼句 芭蕉筆

[県指定一書跡] ④長谷川コレクション・(公財)山形美術館所蔵

涼風(すずかぜ)やほの三か月の羽黒山  
雲の峯(みね)いくつ崩れて月の山  
かたられぬゆどのにぬらす袂(たもと)かな

線は伸びやかで流れるごとく、芭蕉晩年の円熟味をうかがわせる。落款「桃青」は32歳ころから用い始めた俳号で、芭蕉の号とともに長く用いられた。

松尾芭蕉は三重県・上野の生まれ。本名宗房、通称甚七郎または忠右衛門。芭蕉は俳号で別名に宗房、桃青など。年少のころより俳句を学び、江戸に下ってから各地を旅して多くの名句と紀行文を残した。「かるみ」を重んじる蕉風を打ち立て、俳諧の芸術性を高めたことで後世にまで知られる。著作に『野ざらし紀行』『笈の小文』『奥の細道』『嵯峨日記』などがある。

芭蕉が奥の細道に旅立ったのは1689(元禄2)年の春。2ヶ月以上の行脚を経て6月3日に修験道の霊場・羽黒山に到着、同8日には月山、湯殿山を巡っている。これら出羽三山を詠んだのが本作である。『奥の細道』本文にも「坊に帰れば阿闍梨(あじゃり)の需(もと)めに依りて、三山巡礼の句々、短冊に書。」と記されこの三つの句が続く。『奥の細道』では羽黒山の句が「涼しさや」となっているが、芭蕉の同行者曾良(そら)の『俳諧書留』にも「涼風や」とあり、この短冊に記された句が初案であったことがわかる。

本作の伝来は美濃国(岐阜県)の俳人で、蕉門十哲のひとり各務支考(かがみしこう)の後継者として美濃派の基礎を築いた廬元坊(ろげんぼう)による添書が伝えてくれる。阿闍梨の移住とともに美濃国谷汲(たにぐみ)地方に伝わったこの三山短冊が、一時は離ればなれとなったが、同じく美濃派の俳人流可子の努力で、再びそろった経緯が記されている。この添書がしたためられたのは文中の「五むかしを経て…」より奥の細道紀行から約50年後のことと推量され、貴重な資料となっている。